
夢への階段

望月愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢への階段

【Nコード】

N5666B

【作者名】

望月愛

【あらすじ】

水野透、中学3年生。バスケット部のエースだったが県大会を終え引退。そんな中、クラスメイトの望月舞がやたらと透に駆け寄ってきて……。進路、バスケの事、そして恋愛。悩みはたくさんあるのに、何故か吹奏楽をやることに！？…。悩んで、頑張つて、苦しんで、最後は喜び感動する。そんな青春を描いてみました。

一段目：部活（前書き）

この話は私が中学生の時の体験を基に書いています。

稚拙な文章ですが、読んで頂けたら嬉しいです

そして、評価して頂けたらもっともっと嬉しいです！！

一段目：部活

「水野君お願い！」

望月舞が上目使いで見つめてくる。

その目を見るとドキツとしてしまうから、右上の方、つまり窓の外を見つめる。

異常気象のせいか、6月後半になっても梅雨入りしない空は、雲一つなくすがすがしい。

「何回も言ってるけどムリだってば。絶対オレより良い人居るって。だから他のヤツ探して。」

水野透は空を見たまま答えた。

「どうしても水野君が良いの。一生のお願い！」

2時間目後の休み時間、次が体育の為教室に残っている人はほとんど居ない。透もジャージを抱え、体育館へ向かおうとしていたところを舞に足止めされた。

そんな透を見て、友達の陽介と慎はニヤつきながら『お先に』と言って行ってしまった。

「何回言われてもムリ。次体育だから行かなきゃ。ってか慎達が待ってるから行くわ。」

「水野君!!」

透は舞から逃げるように教室から出た。

「待たせてごめん。」急いで男子更衣室に入ると、ジャージに着替えた佐々木慎と野沢陽介が近づいてきて透の脇腹を攻めてきた。

「おい、コラっ、やめろ!!」

抵抗してなんとかふりほどいた。

「透、朝からずっと望月に言い寄られてんじゃん。愛の告白?」

慎が肩に手を廻しつつ言ってきた。

「そんなんじゃ無いって。てか着替えねえだろ。」

「しかし透はモテるなあ。中学入って何人目?」
陽介も便乗してきた。

「透、前に望月の事好きって言ってたよな? やったじゃん、初彼女」

「てか、何でOKしないの? 女の方から言ってきたのに。」

何も言わず聞いていた透がゆっくり口を開いた。

「…あのさあ、お前ら、違う事を『お願い』されてるの知って言っ
てんだろ? タチ悪いなあ!」

「えっ、付き合ってくださいのお願いだろ?」
そういう慎の目は笑っている。

「お前らマジでうぜー。でもそれより望月の方がだいぶウザいわ。」

ここ3日間ずっと言ってくるんだぜ？何回言われたって嫌なものは嫌だってのに。」

不機嫌な透を見て慎が言った。

「吹奏楽部の助っ人だろ？良いじゃんやれば。中学最後の夏、望月と親密になれるチャンスじゃん。」

そうなのだ。望月舞は透に『付き合って』では無く、『吹奏楽部入部』を迫っていたのだ。

「だからそんなんじゃ無いって。大体オレはバスケ部なんだぞ？何でもまた吹奏楽に入らないといけないんだ？帰宅部のやつとか、あんまり活動してない部活のヤツに言えば良いじゃねえか。」

「だけどオレら引退したじゃん。」

慎が言う。

「でも引退してからまだ1週間もたってないんだぞ。」

透と慎はバスケ部員だった。日曜日にあつた県大会までは・・・。

「でも引退したからには帰宅部のようなもんじゃん。」

慎が言った。陽介も言う。

「やれば良いじゃねえか。オレがお前だったら絶対OKしちゃうよ。あの望月があんなにお願いしてくるんだぜ？これをきっかけに付き合えたらサイコーじゃん。」

「だったら陽介、お前やれよ。」

「残念ながらオレはまだ野球部やらなきゃだからさあ。その前に彼女居るしい。」

「うわっ、ウザっ。」

透が言った。

陽介は野球部に所属している。大岡中学野球部は歴史があり、県で1、2位を争っている。陽介はそのエースピッチャー。いわゆる『背番号1』を背負う男だ。部活で期待され、可愛い彼女が居る陽介は幸せだろう。

「てか透じゃなきゃダメだろ?」どうしても水野君が良いのっ」だもんなあ。」

慎が舞をマネて言った。陽介も笑う。

「あゝお前らホントムカつく。」

「吹奏楽、人が足りないから透に頼んでるんだろ?」
陽介が問う。

「ああ。2年の子が5月いっぱい転校しちゃったんだって。」

「やってやれよ」

「嫌だつてば。吹奏楽だぞ?あんなオタク部。」

「ちよつとお、オレの彼女の事オタクって言ってますか?」

陽介が不機嫌そうに言う。

陽介の彼女は吹奏楽部の副部長をやっている。もちろん透も知っていた。

「ちよつ、違うって!ユウちゃんは可愛いし、ってかイメージ的なものだって。」

慌てて弁解する透を見て2人は笑った。

「やってくれよゝ可愛いユウちゃんの為にも。人が足りないって結構悩んでるんだよ。」

陽介が言う。

「そつだよ、やれば絶対望月の高感度UPだぞ。こんなチャンス、他には無いぞ。」

慎ものつてくる。

「お前ら、人事だからって調子こきやがって!!」

「あつ、チャイム鳴った。」

慎がぼつつと言った。

「やべ、間に合わん。」

透はまだ上しか着替えていない。

「やべ、透先行くわ。」

「えっ、ちよつと位待てよ。」

慎と陽介は透を置いて先に行ってしまった。

透も慌てて着替え、体育館へ向かった。

「水野、遅刻。体育館5周してこい。」

体育館へ一步入った瞬間、体育教師の太田和義が厳しい口調で言った。

「…はい。」

ホントなら、ちよつと位良いじゃん!!と言いたいがこの人には反抗出来ない。

3年間お世話になったバスケット部の顧問だから。

「この前言った通り、今日が最後のバスケットボールだ。来週からは水泳だからな。今日はくじでチームを決めて試合をするように。」
透が5周から戻ると太田が話し始めた。

「じゃあ、くじ引きして、チームごと準備体操して30分から試合開始出来るように。」

太田が話し終わると各々が動き出した。

女子の方から『水泳やだー』と話す声が聞こえてくる。
しかし、透の頭の中は水泳どころでは無かった。

舞へ視線を向けてみる。

舞は水泳の事など全く口にせず、友達と笑いながらくじを引いていた。

『かわいいなあ。』

何の苦も無くこの言葉が浮かんでくる。

さらっとした長い黒髪、ぱっちり二重の大きな目、笑うと出来るえくぼ、スツと伸びた手足・・・
まさに美人の典型。憧れない男子は居ないだろう。

「透、ボケつとしてないでくじ引けよ。」

後ろから肩を叩いた後、慎は透と同じ方向を見てみた。

「またまたあゝ望月にみとれちゃってえゝ。」「ばつ、そんなんじやねえよ!!」

会話を遮る為、透は急いでくじを引きに行った。

そんな透を見て慎は笑った。

「透何班？」

「2班。慎は？」

「俺も!!大岡中バスケット最強コンビ復活じゃん。」

「まじで!?!これは楽勝だね。」

そう言つて透は慎の背中を一発叩いた。

「おい、2班ズルいだろ? 慎と透が一緒なんて。」

チームごとにわかれた時、3班になった陽介が言った。

「本当だよ。有り得ん!!」他の人たちも口を揃え言った。

3年3組にバスケット部員は慎と透しか居ないのだ。

「くじなんだから仕方ない!!!30分になったからやらなきゃ!」

慎がそう言つと、みんなしぶしぶ試合を始めた。

県大会でベスト8まで残った大岡中バスケット部レギュラーが2人も居れば、授業のバスケットボールなど…

「余裕の勝利だな。」

チャイムが鳴り更衣室へ向かう途中、慎が言った。

「もちろん。」

笑みを交え透が返す。

最下位だった陽介のチームは片付けをさせられている為先に着替える事にした。

「透、親何て言ってた？」

「えっ、何が？」

「スポーツ推薦の話だよ。唯野高校の。」

「ああ……。」

唯野高校は透の家から電車を使って50分位のところにある私立高校。

バスケット部は2年連続でインターハイ出場を果たした。バスケット部以外の部活も全国大会に名を残している。いわゆるスポーツ校だ。

高校でも部活を続けたいと思う人が憧れる学校。

慎と透は昨日、太田に呼び出され、唯野高校へのスポーツ推薦の話をされた。

「お前らが唯野へ行き、バスケットを続けたいなら推薦をする。しかし、決めたら断れないし、絶対にバスケット部に入り、3年間続けなければならぬ。私立高校だから学費の事もあるし、親にも必ず相談して

決めて欲しい。」

そう言われたのだった。

「オレ、まだ話してないや。」

「話してないの?」

「昨日の今日だし…慎は?」

「言ったよ。やっぱり私立だから、ちょっと嫌がってた。」

「えっ、反対されたの?」

「いや、『どーせ唯野行きたいって言うと思ってた。』って言われた。」

「そっか、良かったじゃん。」

「お前も早く話せよー。唯野でバスケット出来るなんて、何かドキドキするなあ。」

「ああ…。」

「透、どうかした?」

「えっ、何で?」

「急に元気無くなったから。」

「そんな事無いって!!」

透は慎と視線を逸らすかのようにロッカーの中を探りだした。

「もしかして、高校悩んでる?」

慎が伺うように聞く。

「えっ?」

「昨日、推薦の話聞いた後もあんまり嬉しそうじゃ無かったし…まさか、バスケット続けないつもり!?」

「そんなわけ無いだろ。もちろん続けるよ。」

「だよな、なら良かった。唯野のバスケット部はオレらの憧れだもんな。」

慎の顔に笑みが浮かんだ。

透は何も言わず着替え続けた。

進路…

それは透にとって今一番の悩みだった。

二段目：6月26日

6月26日、日曜日。午後3時40分。

透の部活引退が決まった瞬間。

相手は昨年の勝者、緑が丘中学。
たった2点差だった。

大会が終わり、解散した後も透は会場となった市民体育館の前にずっと佇んでいた。慎達は戦った緑ヶ丘の選手と話をしていた。

今年こそ全国大会に行く。

ずっとそう思って練習してきた。それにふさわしい練習をしてきたし、チームの団結も今までで一番良かった。

なのに、全国どころか県大会敗退なんて…
透は現実を受け入れられずにいた。

「君、大岡中の5番の子だね？」
呆然とする透に一人の男性が近づいてきた。

透は現実に戻り、その男性を見て
「はい。」
と答えた。

多分50代後半で、少し中年太り気味だが背が高く、優しい笑顔の男性。

透はこの人を知っていた。

「私は今尾高校でバスケット部の顧問をしている者なんだが……」

「……知っています。山野先生。」

「ああ、覚えてくれていたのか、ありがとう。」

「もちろんです。」

というよりも、この辺りでバスケットをする人で彼を知らない人の方が少ないだろう。

今尾高校バスケット部は、山野先生が赴任した4年前からどんどん強くなり、県内で唯一、唯野高校と競う力のあるチームである。

彼は今尾高校に移動する前、唯野の顧問をしていた。

彼は、唯野高校のバスケット部を築いた人。そして、今尾高校のバスケット部を築きあげようとしている人。

そんな山野が自分に話掛けてきた。透はとても驚いていた。

「試合、見させて貰ったよ。残念だったな。」

「……はい。」

「悔しい？」

「はい。」

「何で？何が悔しい？」

「2点差で、1本差で負けた事です。」

透は正直な気持ちを言った。

「それは悔しくて当たり前だ。それ以外には？」

「えっ？」

透は戸惑った。彼は何を言わせたいのだろうか？

「君のプレーはとても素晴らしかった。今日見た中で、私の一番好きなプレーをするのが君だった。」

「ありがとうございます。」

山野先生から言われるなんて、素直に嬉しい。

「しかし、君のプレーには弱点がある。」

「？」

「君は気付いてないだろう。多分君のチームメイトも。しかし、相手の、緑が丘中学のキャプテンは気付いてしまった。それが今日の敗因だろう。」

透は理解できなかった。

「試合の敗因って……」

まるで自分のせいで負けたかのような言われ方だ。しかし、透的にはミスもしていないし、プレー自体に後悔は無い。

「僕の弱点って何ですか？」

そこまで言われたら気になる。

「それは自分で見つけなさい。人に聞くよりも、自分で気付いた方

が成長出来る。」

山野は切羽詰まっている透とは逆で、おおらかに、笑顔で言った。

透は自分のプレーを振り返ってみた。しかしわからない。

「今すぐにはわからないだろうが、そのうちきつと気づく時が来るだろう。因みに、技術的な問題では無い。君の技術は本当に素晴らしい。君の相棒の8番君も。」

8番君とは慎の事だ。

「…ありがとうございます…。」
しかし嬉しいのか何だかわからない。

「ところで、高校は唯野へ行くのかい？」

「バスケ………続けないかもしれません。」

透は目を見ずにゆっくり答えた。

「そうか…。込みいった事情でもあるのかな？実は…君に我が校へ入って欲しいと思ったんだが…。」

「えっ!?!」

驚いた。

山野先生本人から直接誘われるなんて…。

バスケを始めた小学校の頃から憧れていた唯野高校の元監督から誘

われているなんて！！

「バスケに関係なく、今尾へ入る気は無いか？」

「入れるなら入りたいんですが…成績が…」

今尾高校は進学校であり、評定4・3以上無いと入れない学校。そして東大合格者が毎年5人は居る学校だ。

その上公立高校の為、特待生制度や推薦は全くない。

「そうかぁ。確かにウチは勉強第一で、部活の時間は唯野の2分の1以下だ。前まで唯野で思う存分部活をしていたからな、このギャップに正直戸惑った。」

山野は空を見上げ続けた。

「その上生徒のやる気も違う。」

唯野はスポーツ推薦があるから、私の誘った巧い子や、バスケがやりたくて仕方ない子が入ってくる。

しかし、今尾は勉強の息抜き程度に考えてる子も居るんだ。」

「とりあえず、君には今尾に入ってもらいたい。そうすれば、絶対バスケ部に入りたい！と思わせるから。」

透は哑然とした。

「さて、そろそろ行かなきゃなあ。来年、楽しみにしているよ。」
そう言って彼は去っていった。

バスケを続けるか…

この数分の出来事により、透は一層悩む事になった。

三段目：放課後

「ふああゝ。」

大岡中の教師の中でイチバン若い、遠藤先生と目が合う。

透はとつさに口に手をあてた。

「水野君、イチバン前の席でそんなに大きなあくびしないの!!」

「すみません。」

一応謝るが、若く、背も150センチあるか分からない位の遠藤に怒られても全く気にならない。

体育をやって、給食を食べた後の5時間目。

ポカポカとした心地よい天気。

たとえ前日にたくさん寝たとしても眠くなる。
しかし、透はずっとバスケの事を考えていた。

続けるか、

続けないか。

続けるとしても唯野には行かない事、

慎に伝えなきゃ。

でも、言ったら慎は

「なんで!？」を繰り返すだろう・・・

「水野君!」

隣の席の小野ひかりが小声で透をつついた。

「ん？」

透が気づくとクラス全員立っており、全ての視線が自分に向けられていた。

だいぶ熟睡していたらしい。
慌てて起立した。

「水野君、明日は一番難しいトコ当てるからね。」

遠藤先生が去り際に脅すように言った。

今日は水曜日。

水曜日は職員会議があるため授業は5時間で終わる。

あと、HRと掃除を終えれば3時前に帰れてしまう。

『部活が無いつてこついう事なんだな。』

楽だけど、悲しい。

「HR始めるぞ。」

担任の宮沢俊幸が入ってきた。

宮沢は数学担当のくせに毎日ジャージでいる。

テニス部の顧問をしているからか、40歳過ぎているのに体育教師並の身体つきをしている。

そんな教師。透にとって宮沢は好きな方の先生だ。

「知ってると思うが、もうすぐ期末テストだな。このテストの出来次第で志望校を考えて欲しい位の大切な試験だ。」

教室の中がざわめく。

「そこで、今から配るプリントに志望校を書いてきて欲しい。自分の志望校と親の志望校と書くところがあるから、ちゃんと親にも聞くように。」

期限は金曜日まで。これは9月の個人懇談で使うから、しっかりと考えてこいよ。」

透は回されたプリントをぼんやりと見つめた。

「じゃあ後は掃除をしっかりとやるように。先週はサボったヤツが数人居るからな。時間一杯やるように。では終わり。」

『進路かあ……。しかも親に相談……』

透は椅子をゆっくり上げ、考えこんでいた。

「水野君!!」

今の透より100倍テンションが高い声が耳に入る。

後ろを向くと、望月舞がいた。

「あ。」

思わず口から出た言葉だった。

バスケの事を考え過ぎて望月の事をすっかり忘れていた。

「ね、今日の放課後ヒマ？ちょっとで良いから吹奏楽見にこない？」

望月がくりくりの大きな目で見つめてくる。

「あ…今日は慎と公園でバスケする約束してんだ。」

吹奏楽を見に行くなんて…まっぴらごめんだ。

慎と2人で1on1をやるといっだけの約束だが、予定があつて良かった。。。

「30分とか…10分で良いから。見るだけだし、おねがいっ！」

舞が見上げてくる。

その目は昔よくCMに出ていたチワワのようだ…。

「いや、約束は守らなきゃだし、てか何回も言ってるけど、俺吹奏楽なんてできないよ。」

「そんな事ないって！水野君なら絶対出来るよ。小さい頃からピアノやってたんだし。」

「ピアノは中学入って辞めたし、もうムリだってば。とにかく、助っ人はやるつもりないから！」

これ以上何を言えば分かって貰えるんだ！？透はイライラしてきた。

「なあ透。」

気が付くと慎が透の横に立っていた。

「慎。」

透は救われた気持ちになった。これで望月から逃れられる。

「悪いんだけど今日用事出来ちゃったんだ。バスケ、また明日な。悪いけど先帰るわ。」

「えっ！？慎??」

透は慌てて帰ろうとする慎を止めた。

「そうだ、透放課後ヒマになっちゃっただろ？吹奏楽見に行けば良いじゃん。」

そういう慎の目は笑っていた。

「慎、お前、それが狙いで…」

「じゃあな透。望月サンもバイバイ。」

喋りかけた透を遮って慎は教室を出て行ってしまった。

望月と目が合う。

「…じゃあ…練習見に来れるね。」

望月がゆつくりと、伺うように言った。

逃げ場の無い透は頷くほか無かった。

「でも、掃除終わってからな。俺、先週サボっちゃったしちゃんとやらねと。」

「サボったのって水野君だったんだ。」

「あと、慎もだぞ。ってあいつ、また帰りやがった!！」

舞はこの上ない笑顔で笑っていた。

それを見て、透の胸が音をたてた。

四段目：恋は盲目？

「慎、おはよ。」

「おつ、おはよ。」

6月30日午前8時。

今までだったら部活をしていた時間。

『部活してなかったらこんなにゆっくり学校来れるんだな。』

佐々木慎は今までより1時間遅く学校に着いた。

朝の一時間の差はとても大きい。

いつもなら全く見ないテレビと新聞を見てから学校へ向かった。

靴を履き替え、教室へ向かう。

途中、隣の体育館からボールの弾む音、掛け声が聞こえてきた。体育館へ繋がる渡り廊下の前でふと立ち止まる。

1年生と2年生が練習している姿が見えた。

なんとなく、頼り無い後輩達の姿。

もし自分が居たら…。

あの試合で勝っていたらまだ部活出来たのになあ…

無意識に込み上げてくる思い。

『だめだ、そろそろ前に進まなきゃいけない。』

慎はくるっと回り、ゆっくりと歩き出した。

「透、おはよ。」

教室に着いた慎は一番前の席に座っている透の元へ行った。

「昨日どうだったんだよ？ちゃんと告白したかー？」

「……」

「透？」

透の反応がない。

「透どうしたんだ？聞いてる？」

慎は透の顔を覗きこんだ。うつ向いた透の目は下に向けられていた。

「おい、何かあったのか？」

透は無言でずっと一点を見つめている。

慎は透の視線を追ってみた。

「にゅ、入部届!？」

透の視線の先、透の手には『入部届』と書かれたB5の半分くらいの小さな紙がしっかりと握られていた。

「透、吹奏楽に入部する気になったのか？」

慎の問いで、透はやつと意識を取り戻した。

「そんなワケないだろ!？」

「じゃあ何で入部届持ってるの？」

「ってか慎、昨日ワザと帰っただろ？」

「へへっ。」

慎はニヤッと笑った。

「お前のせいで昨日は散々な目に遭ったんだからな。責任とれよ。」

「責任ってなんだよ？俺はただ、透と望月が2人つきりになる場をセッティングしてやったただけだぞ？」

「お前マジム力つく。…でも望月のがもつとム力つく。」

「えっ、何何？望月に何かされたのか？ もしかしてフラれた？」

慎が楽しそうに聞いてくる。

「だから、告白なんてしてないよ。誰があんなサイテーなヤツに告るかっての。」

「ありゃー、愛情を通り越して、憎しみの域に達した？」

「いい加減ウザイぞ慎。」

「すみません。で、何があつたの？練習見に行つたんだろ？」

「ああ、誰かのせいで行かざるをえんくなつたからな。30分位で帰るって約束で行つたんだよ。

そしたら、音楽室に入った瞬間、吹奏楽部の全員に拍手で迎えられててさあ…」

透は話しつつ入部届を机の上に軽く放り投げた。

「んで、なんか勝手に『ありがとう！！ホントに助かるよ』とか色んな子に言われて困つてたんだよ。」

顧問の須田先生まで

『水野、大会出てくれる気になったんだ。ありがとな。』
とか言ってくる始末で…。

望月に、

『俺は見学だけって言っただろ?』
って言ったたら、

『みんなこんなに歓迎してるのに今さら言えないよ。』
とか言いやがって…あり得んだろ?

しかも30分で帰るって言うてたのに、帰りそびれて合奏も見てく
事になって、結局練習終わるまで居たんだぜ!？」

透は早口で一気に吐き出した。

「そりゃひどいなあ…」

興味本意で聞いていた慎も段々と透に同情していった。

「まだ続きがあるんだよ。てかこの先が最悪なんだよ。

部活のあと望月とオレ、音研（音楽研究室）に呼び出されたんだ。
行ったらさあ、須田に入部届渡されて、

『これないと活動出来ないから、親にサイン貰って明日持ってきて』
って言われたから、

『俺、やるつもり無いんですけど…』ってちゃんと説いたんだよ。
そしたら須田が望月に

『水野がやるって言ったから連れて来たんじゃないの?』

って聞いたんだよ。望月のやつ、黙りこんじゃってさあ、答え無か
ったんだよ。…たら…。」

「…そしたら？」

「『ちゃんと答えろよ!!』」

つていきなり怒鳴ってきた。

望月が

『嫌って言われたんですが、見学だけで良いから来てってお願いしました。』

つて言ったら、

『お前は水野の意思を無視してやらせようとしてたのか?』

とか色々言つてめっちゃ望月に対して怒鳴ってたよ。俺、めっちゃ気まずいじゃん…」

「ああ…」

慎の透に対する同情はどんどん増して行つた。

「望月、半泣き状態でさ、なのに須田はずっと怒鳴ってるから、望月が可哀想で、思わず…」

「思わず？」

「……」

立て続けに話していた透の言葉が止まった。

「…思わず、」

『先生、俺やります』

って言っちゃったんだよおお　　！！」

透は叫ぶように言い、机に突っ伏した。

「マジで？やるって言っちゃったの？」

「あの場に居たらそう言うしか無かったんだよ……」

「その後どうなったの？」

「須田のやつ、いきなり態度変えて、

『ホントに？水野、ありがとう』

って超スマイルになって、

『じゃあこれ明日持って来て』

って言って入部届渡して、

『下校時刻過ぎちゃったから急いで帰ってね。』

って言って音研から出てったんだよ。」

「うわぁー透、相手の策略にまんまとはまっただって事じゃん。」

「それが！！去り際に

『望月、作戦成功したなっ
』

って言ったんだよ！」

「えっ？ホントに作戦だったの！？」

「そうゆ こと。望月もそれまで涙目だったくせに

『先生、ありがとうございます。』

とか笑顔で言ってるし、須田は

『水野、男に二言は無いからな。』

って言って去ってった。」

「さすが須田先生。そういう手で今まで男を騙してきてそうだな
」。」

「そうじゃなくて、騙すなんて最悪じゃね？須田が居なくなっ
てから望月に、

『もしかして、2人で仕組んだのか？』

って聞いたなら、望月のやつ…

『引つかかる方が悪いんだよ
』

って言ったんだよっつ！！」

「望月って性格悪いんだな…。」

慎は話を聞きつくづくそう思った。

「んでこうなったわけ。」

透は全てを吐き出した為、少しスッキリした。

「そんなの詐欺のよ なもんなんだからやらなきゃ良いじゃん?」

「もちろんやるつもり無いよ!!」

「なら何で入部届握りしめてたの?」

「……何でだろ?」

「……」

2人とも黙り込んでしまった。

「水野君おはよ ！！」

朝練を終えた望月舞が透達の元へやってきた。

「水野君、昨日はごめんね。ちょっとやり過ぎだったって反省したんだ。でも、水野君が入ってくれるから本当に嬉しい！！本当にありがとうね。」

そう言う舞の顔は、今まで透に見せた事のないくらい嬉しそうな、素敵な笑顔だった。

透の胸が音をたてる。

「あれ？入部届まだ書いてないの？」

机の上に置かれた入部届を見て舞が問いかけた。

「『入部しない』とか言わないよ…ね…？」

さっきまでの笑顔が急に曇った。

「あ…やるよ！！親に言うの忘れちゃってさ。」

透は立ち上がり、必死に答えた。

「透！？」

驚いた慎が呼びかける。

「ホントに？」

「うん。」

「ありがとう！！水野君大好きっ！！」

嬉しそうな舞は大きな声で言うと同時に透に抱き着いた。

「！？」

騒がしかった教室が静まり返る。

そして教室中の視線は透と舞に集まった。

数秒後教室はさっきよりざわめき出した。

女子のかん高い声が響く。

透の頭は真っ白になった。

「ちーちゃん、水野君やってくれるって！」

そう言いながら舞は同じ吹奏楽部員の元へ駆け寄って行った。

「何かすごい事になってるな。」

荷物を持ったままの祐介が慎の隣にやってきた。

「祐介。さっきの見てた？」

「ああ。透、吹奏楽やる事にしたのか？」

「さすが！！分かってるねえ。」

「何で急に？」

「『恋は盲目』ってやつだよ。」

放心状態の透を見つつ慎は言った。

- - - - -

「水野君、今日の放課後から部活来てね。」

5時間目が始まる前、慎、陽介と話していたところへ舞がやってきた。

「えっ？入部届は？」

「須田先生に話したら、水野君のお母さんに連絡してくれて、水野君のお母さんから入部の許可貰えたの。だから今日から出来るって。」

舞が嬉しそうに話す。

「親に連絡したの！？」

「うん。おばさん喜んでたって。どんな形であれ水野君がまた音楽やってくれるのが嬉しいんだよ。」

「…分かったよ。」

「掃除終わったらすぐ行くからね。」

そう言っ舞は去って行った。

「望月と透の母さん面識あるの？」

陽介が問う。

「ああ。俺と望月は小さい頃から同じピアノ教室通ってたから。同じ学年は俺らだけだったし、自然と家族ぐるみで仲良くなったわけ。」

「その割には透と望月って話したりしてないよな？」

「それは…ピアノ辞める時、望月に言ったら猛反対されてさ、それで喧嘩になって気まづくなっただまだったんだよ。」

「そういえばお前と望月、小学校ん時は仲良しだったもんなー。俺は面識無かったけど。」

慎が言う。

大岡中学校は3つの小学校から生徒が集まる。

陽介は大岡中央小学校出身。慎、透、舞は大岡南小学校出身。慎は4年生の時に転校してきたのだった。

「中1の時、クラス離れたからお互い知らんふりしてて、2年で同じクラスになってもあんまり話さなかつたくせに、いきなりこれだぜ!？」

「そんな事があつたのにずっと望月の事好きだったんだな。透、めっちゃ一途じゃん。」

陽介が感心したように言う。

「昔の事なんて気にするなって。大丈夫!お前らは今クラス公認力ツプルだから。なっ陽介」

「そうそう。何てったって『水野君大好き!!』だもんな」

「いい加減その話は止めろよ!からかいやがって。」

「だって衝撃的だったもんなあ。」陽介が言う。

「あんなに望月に対して怒ってたくせになんでやるって言っただよ？」

慎が問う。

「分からんけど雰囲気であ…。ま、大会が終わるまでだから１ヶ月くらいだろうし…吹奏楽部ってそんなに強くないだろ？」

「去年は地区大会落ちだったらしいよ。」

陽介が答える。

「でも今年来た須田先生は去年まで東海大会常連校の指導者だったらしいよ。練習もだいぶ変わったって。」

「そうそう、昨日練習見たけどスパルタだった。女なのに男口調だしなあ。」

「ま、スパルタには慣れてるから大丈夫だろ。」

慎が言った。

「夏休みはバスケ部のOB戦や合宿もあるしちゃんと来いよ。」

「もちろん。」

透が答えた。

四段目：恋は盲目？（後書き）

最後に出てくる祐介は陽介の間違いです。
すみません m (——) m

五段目：パーカッション

「今日から正式に部員になった水野透君です。」

放課後の部活が始まってすぐ、透は教壇の上に立たされた。横に居る舞は部員に透を紹介した。

一斉に盛大な拍手が起こった。

「何か一言言つて。」

舞が小声で促す。

たくさんの、知ってるような知らないような顔が透に向けられる。なんとなく、威圧感に負けそうになる…。

「えっと、3年3組の水野透です。吹奏楽は初めてやるので…頑張りたいと思います。よろしくお願いします。」

言い終えるとまた拍手が起きた。

「みんな知つての通り、水野君にはパーカッションをやってもらいます。分からない事だらけだと思うので色々教えてあげて下さい。」

舞が言うど威勢の良い返事が返ってきた。

「パーカッション!?!」

透は思わず聞き返した。

「あれ？言って無かったっけ？とりあえず挨拶終わるまで待ってて。」

そう言って舞は教壇から降り、透を手招きした。

そういえばどんな楽器をやるか聞いて無かった。それでOKしてしまった自分が不思議でたまらない。

「それではパート練習に移って下さい。」

部長らしき人：確か1組の平沢まゆが言つと一斉に音楽室から人が居なくなつた。

「水野君、パーカッションの子紹介するから来て。」

舞に促されるまま、大太鼓や鉄琴の並ぶ所へ行つた。

「望月、パーカッションって何だっけ？」

「えっ！？知らないの？ピアノだけど、音楽ずつとやってたのに。」

本気で驚いている。

「度忘れしただけ。その名前は知ってるんだけど…。」

舞の顔は相当呆れている。

「パーカッションは打楽器の事。太鼓やシンバルとか。」

「ああ、分かった分かった。」

「県のピアノコンクール入賞した事がある人がこんな事言うなんて。」

舞は嘆くように言った。

「そんな昔の話するなよ。ま、何かは知ってんだから良いだろ？…てか打楽器かぁ。何の楽器？」

「まあとりあえずパーカッションのメンバー紹介するね。パーカス集合ー！！」

舞が言うつと楽器の準備をしていた2人の女の子が集まってきた。

「さつきも紹介したけど水野透君です。」

透は軽く頭を下げた。

「じゃあ一人ずつ自己紹介ね。じゃあ佐智子から。」

舞が指名するとショートカットの元気そんな子が喋り始めた。

「2年2組の下平佐智子です。主にバスドラムを担当してます。」

「1年3組の森本美希です。グロッケンやシロフォンなどをやります。」

透はこの子を知っていた。同じ図書委員の子だ。

「で、私がパートリーダーの望月舞です。楽器はスネアドラムとティンパニー。そうそう、あと自由曲の時だけクラリネットの相沢佳代ちゃんがパーカッションをやってくれるの。また後で紹介するね。」

「課題曲と自由曲あるの？」

「うん、4曲の中から1曲えらんで演奏する『課題曲』と好きな曲を演奏する『自由曲』があるの。…って知ってるよね。んで、今年の課題曲はマーチ（行進曲）だから人数少なくて良いんだけど、自由曲は5人は居ないと出来ない曲でね…」

「って事は俺は2曲ともやるの？」

「うん。」

舞は何の躊躇もなく返事した。

「それで何の楽器？」

そろそろ教えてくれても良いだろう。

「ああ、水野君にはシンバルをやって貰います。」

「シンバル！？」

「うん。嫌？」

シンバル…？猿のおもちやが脳裏に浮かぶ。

「ま、私が付いてるから大丈夫　美希と佐智子も学年的には先輩だけど、そんなのは気にせず、楽器の事色々教えてあげてね。」

「はい。」

美希と佐智子は大きな声で返事をした。

「今日は30分後から全体練習だから、それまで2人はウォーミングアップと練習しておいてね。私は水野君に色々教えるから。」

舞が言い終わると2人は小太鼓のバチとジャンプ数冊を持って音楽室を出て行った。

さっきまで40人近くいた音楽室に居るのは、舞と透の2人だけになった。

「何でマンガ持ってたの？」

不思議に思ったので聞いた。

「太鼓の革は消耗品だから、基礎練習は雑誌を叩くの。理由は他にも色々あるんだけどね。」

「へえ。」

「じゃあ色々説明するね。えっと…楽器の名前は分かる？」

「一般的なのは分かるかな。」

「じゃあコンクールで使う主要楽器を説明するね。この小さい鉄琴がグロッケン、小さい木琴がシロフォン、大きい鉄琴がビブラフォン…」

舞はそれぞれの楽器を適当に叩きつつ説明した。

「これらが音階のある鍵盤楽器。次に太鼓類ね。よく大太鼓って言われるバスドラム。」

低いズーンという音が響く。

「そしてこれが私の十八番の小太鼓・スネアドラム。」

軽快なリズムが聞こえてくる。透は昨日練習を見学した時、舞がスネアドラムを叩いていたのを思い出した。

「そしてこれがティンパニー。打楽器の王さま。」

ティンパニーは大きな太鼓が4つならんでいる楽器。

「第二の指揮者だろ？」

透が言った。

「そのとおり。」

オーケストラでティンパニーは第二の指揮者と呼ばれる程重要とされている。

「最後に、これが水野君にやって貰うシンバル。」

『ジャーン!!』

「わっ!？」

大きな音に透は驚いた。

「シンバルはパーカッションの中でイチバン難しいって言われる楽器なの。」

「えっ? 難しいの?」

サルにでも出来る楽器なのではないのか?

「難しいよ。でも水野君なら出来るって信じてるから。」

信じてるって言われても…まだやってもいないのに。

「今日はこの後すぐに全体練習だから昨日みたいに見学しててね。多分課題曲だからシンバルの楽譜渡しておくね。」

舞はクリアファイルからA3サイズの紙を取り出し透に渡した。

「ベストフレンド…」

透は書かれている文字を読んだ。

「そう、課題曲4の曲名。」

「なんだかクサイ曲名だなあ。」

「そついう事言わないの!」

音符を目で追ってみる。

「何これ。四分音符ばっかじゃん。楽譜要らんくね?」

楽譜は単純な音符しか無かった。

「そんな事言つてられるのも今のうちだよ。」

舞は脅すように言った。

「どーゆーこと?」

「そのまんまだよ。この曲はすごくシンプルな作りだけど、逆に言えばごまかしの効かない曲なの。」

「それ、ピアノの先生が良く言ってたよな。」

透はピアノをやっていた頃を思い出した。

「そついえば、多部先生がよくいうね。最近モーツァルトやってるんだけど、そついえば言われたや。」

「まだピアノやってるんだな。調子はどう?」

「調子?悪くはないよ。でもここ一年は部活に中心置いちゃってるからなあ。」

「そつかあ…」

聞いたものの、何と返せば良いかわからなかった。というよりも、辞めた奴が言う事なんてない…。

「って話がそれちゃった！部活中は練習に関する事以外の話は禁止だからね！」

舞が慌てて言った。

「はいはい。」

2人が話していると、少しずつ部員が音楽室に戻ってきた。

「じゃあ見学しててね。決して寝ないように！」

「それぐらい分かってるって。」

「ま、英語の時間に熟睡してたし大丈夫よね。」

舞が冗談っぽく言った。

六段目：シンバル

音楽室中に重い空気が流れる。

課題曲の練習を始めて約20分、須田の怒鳴り声が響いた。

「おいペット！！お前らちゃんと練習してんのか！？」

「…はい。」

トランペットのパートリーダー、林友子が答える。

「なら何で何で出だしの1小節が吹けないんだ？」

友子は黙りこんだ。

「こんなんじゃ全体練習やっても無駄だ。今日は個人練しろ。全体終わり！！」

そう言っただけで須田は音楽室から出て行った。

数十秒間、部員全員止まったまま動けずにいた。

慎が言っていたようにバスケット部で散々怒鳴られてきたが、やっぱり怒鳴り声に慣れはしない。

というより、女の先生がこんなに怒るのを初めて見たショックかもしれない。

『ガチャッ。』

静まり返った音楽室にドアを開ける音が響く。

「望月。」

扉を開け、舞を呼んだのは須田だった。

舞は瞬時に反応し、扉の方へ向かった。

「お前ら何してんだ！？さっさと練習に行け。」

須田が言つと全員テキパキと動き始めた。

「あ、あと水野も音研来て。」

ドキドキしつつ、透も音研へ行つた。

音研の部屋の狭さが、なんとなく威圧的に感じられる…。

「水野、もうシンバル叩いたか？」

「まだです。」

言葉より先に首を目一杯振っていた。

「明日の合奏からシンバルも出来るようにしといて。」

「えっ！？」

透と舞の声が重なった。

「コンクールまで1ヶ月、しかもテスト休部があるから実質半月位しか時間が無いんだ。のんびりやってるヒマはない。」

須田はなんのためらいもなく言った。

「先生、それはちょっと…」

舞が言う。透も首を縦に振った。

「さっさと代わりを勧誘せずに、水野が良いって言って、バスケット引退まで待ってたのはお前だろ、望月？」

「はい…。」

「もう充分待たせたんだから、明日からやりなさい。そろそろ全体の音を聴かなきゃバランスがとれない。コンクールに間に合わない。」

そう言った須田の顔は深刻で、従うしかないと思った。

「分かりました。」

舞と透の声が重なった。お互いに驚き目を見合わせた。

「あはは、息ピッタリじゃん。その調子でスネアとシンバルも合わせてくれ。スネア、バスドラム、シンバルの三角形が崩れたらマーチは終わりだからな。」

須田は笑っていたが、透には脅しに聞こえた。

「あり得ないよ。」

音研を出た後、舞が言った。

「てか俺、あの楽譜ならすぐ出来るよ。」

冷静になって考えてみれば、四分音符と全音符くらいしか無い簡単な楽譜だ。

「悪いけど絶対無理。手を叩くと同じくらいに考えてるでしょ？」

「……」

『その通り』と言いたかったが雰囲気的に言えなかった。

「打楽器って叩くだけでしょ、誰でも出来る」って思われるから嫌なのよね。そんな簡単じゃないのに。」

舞が感嘆して言った。

「難しいってのはよく分かった。でもやるしかないだろ？」

感情的な舞とは違い、透は落ち着いていた。

「それはもちろんだよ！」

「でも『絶対無理』って言ったろ？そんな気持ちじゃ出来るわけないじゃん。その言葉キライ。」

舞はドキツとした。そんなつもりは無く、流れで出た言葉だったのに……。

舞は『絶対無理』と言った事を後悔した。

「水野君ってさ、昔っから負けず嫌いだよね。」

「はあ？」

「ピアノやってた頃私の事めっちゃライバル視してたでしょ。」

「それはお互い様だろ？俺的には望月のが敵対心強かった気がするけど。」

「そんな事無いって。水野君がさ、何でも出来ちゃうのはその意志の強さがあるからだよね。」

「いきなり何言ってるの？」

「ピアノすごく巧いのにキツパリ辞めちゃって……しかもバスケットでも有名になっちゃうんだもん。」

「有名じゃないよ。本当に巧かったら全国大会行ってるだろうし……」

ふと今尾高校の山野先生の言葉が甦った。

『君のプレーには弱点がある』

『それが試合の敗因だろう』

「じゃあ、吹奏楽で全国大会目指そ！」

少し暗くなった透を察してか、舞は明るく元気な声で言った。

「行けるの？去年は地区落ちなんだろう？」

「去年なんて関係ないよ。『絶対無理』はキライなんでしょ？だったら全国大会だって行ける。私は行くつもりだから！」

舞の言葉に迷いや諦めは無かった。

「りょーかい。」

「やば、喋りすぎちゃった。さっさと練習しなきゃ。時間は限られてる！！シンバルとメトロノーム持って外行こう。」

「はいよー。」

音楽室と校舎を繋ぐ渡り廊下の横の日陰で練習する事にした。

自然と透の心は、頑張ろうという思いと、シンバルを巧く叩く自信で満ちていた。

が、この自信はすぐ打ち崩された…。

「違う。」

シンバルの練習を始めて30分以上、舞はずっとこの言葉しか言っていない気がする…。

「もっとシンバル全体を響かせるの。ジャーンって。」

「そんな抽象的な事言われたって分からんって。」

透は全くコツを掴めずにいた。

「大切なのは脱力。トライアングルを強く握って叩いたら響かないでしょ？それと一緒に。身体中の、特に腕の緊張を無くして、自分の腕も楽器の一部って思って叩くの。」

「りょーかい。」

透は一度シンバルをスタンドに置き、深呼吸をした。

身体中の力を抜きリラックスしもう一度叩いてみた。

「ジャーン」

「あっ、今の良かった！」

舞が嬉しそうに言う。

「ちょっとだけイメージ分かったかも。」

感覚が、なんとなくバスケのシュートをする時に似ている気がした。

「忘れないうちにもう一回やろ。」

透は頷きもう一度叩いた。

『プスッ。』

「あれっ？」

音が鳴らない。透は驚き手元をずっと見つめた。

「それは空気が入っちゃったの。両方のシンバルがぴったりと重なると空気の逃げ場が無くなって音が響かないんだ。だから2枚をちよっとズラして叩くって言ったの。」

「そうだった、忘れてたや。」

もう一度叩いてみる。

『ジャン。』

「上手い上手い。やっぱり腕力あるから安定してるし上達が早いね。じゃああと20回くらい叩いたら次進もっか。集中すれば出来るから。」

「はいよ。」

途中4、5回やり直しになったが透は20回叩き切った。

「オッケー。今のが全音符とかの基本ね。次は連打、四分音符の練習ね。」

「らじゃ。でもちよつと休憩しよ。水飲んでくる。」

約1時間、日陰といえど夏の野外でシンバルを叩き続けるのは、思った以上に疲れる事だった。

「じゃあ5分休憩ね。」

「…やっぱだめ。」

「えっ?」

校舎内へ行こうとしていた足を止めた。

「みんな戻って来てる。もう時間だ。」

「えっ、もう?」

管楽器の子が続々と音楽室へと戻ってゆく。

「どうしよう。まだ全く連打やって無いのに。やっぱ明日までになんてム…」

舞は言いかけて止めた。

「ムリって言おうとしたんだろ？」

透が問う。

「止めたもん！それより早く音楽室戻らなきゃ。行こっ。」

「はいはい。」

透はシンバルとスタンドを持ち上げた。

『あつ、夏の匂い。』

心地よい風に夏の訪れを感じた。

七段目：進路

「ただいまー。」

「あつ、お兄ちゃんだ！おかえりー。」
妹の美沙がリビングから出てきた。

「透おかえり。吹奏楽やつてきたの？」

母親の恵美子の声がキッチンから聞こえる。

「ああ。」

「そっかぁー。お疲れさま。もうすぐご飯出来るから着替えてきなさい。後で話聞かせてね。」

透は2階にある自分の部屋へ向かった。
階段を登る足がなんとなく重い。

「疲れたぁー」

部屋着くと同時にベットへ飛び込んだ。

部活の後、舞と二人で近所の公園に行き約1時間ほどシンバルの練習の続きをしてきた。

なのに全く上達しなかった。

本当に、見た目以上に難しい。
サルには叩けないだろう。

『着替えなきゃ。制服シワになるよなあ…』

分かってはいるが動く気がしない。

2時間くらいシンバルをやっただけなのに…。これごときでこんなにだるいなんて。

仰向けになり腕を上げた。

その腕にはしっかりと筋肉が付いている。

この3年間で腕は太く、逞しくなった。腕だけではない、身体全体が力強くなった。背も15センチも伸びた。
全部バスケの効果だろう。

なのにこんなに疲れるなんて…

『部活終わって体力落ちたかなあ。』

ベットにいと眠気が襲ってきた。

『お兄ちゃんーご飯出来たよ。』

うとっとしかけた時、階段の下から妹の声が聞こえてきた。

しぶしぶ着替え、リビングへ向かった。

「吹奏楽はどう？」

食卓に着くなり母が尋ねてきた。

「お兄ちゃん吹奏楽やるの!？」

美沙が目丸くし驚く。

「お母さんびつくりしたのよ。学校の先生から電話掛かってきたから透が何かやらかしたのかと思ったわ。」

「ひでえ。」

「何の楽器やるの？先生は打楽器としか教えてくれなくて。」

「シンバル。」

「へえー目立つじゃない。打楽器だから舞ちゃんと一緒なんですよ？」

「そうだよ。」

『舞』という言葉にドキツとしてしまいが気にしない素振りをする。

「舞ちゃんはすごいわねえ。勉強も出来るのに部活とピアノを両立してて。」

「両立しなくて悪かったね。」

「そんな事言つて無いでしょ!」

一言一言甲高い母親の声がイライラを増加させる。

「何でそんなに苛ついているの？」

答える気がしない。

「お母さんが舞ちゃんばかり誉めるからだよ」

美沙が笑いながら言った。

「ばか。ちげーよ。」

透はキツパリと否定した。

ただ、舞の話を家族でしたくないのは確かだった。

「やってみてどうなの？楽しい？」

「まだ分かんないよ。今日始めたばかりだし。ただ楽しくなる事は無いと思う。」

「透疲れてるでしょ？」

「別に。」

「顔に出てるわよ。それに透は疲れると怒りっぽくなるからすぐ分かっちゃう。」

返す言葉が無かった。美沙が笑う。

「そうそう、進路調査の紙、明日提出でしょ？」

「そーいえば。」

すっかり忘れていた。

「どうするの？」

「まだ決めてない。」

「唯野高校の推薦はどうなの？」

「何で知ってんの！？」

母には全く話して無かったのだった。

「昨日のPTA集会で慎ちゃんのお母さんに聞いたの。慎ちゃんは唯野行くんでしょ？」

「そう言ってた。」

「何で推薦の話してくれなかったの？とっても良いお話なのに。」

「本気でそう思ってたの？てか唯野行く気は無いから。だから推薦の話もしなかった。」

母は黙りこんだ。

美沙は気まずいのか、テレビに夢中なフリをし、黙々とご飯を食べ

ている。

「…お父さんの事気にしてるの？」

母が重い口を開いた。

「約束だから。卒業したらこの家は出てくよ。」

「だから何回も言ってるじゃない、お父さんとは話をつけて、お母さんがずっと2人とも育てるって!!」

「慰謝料貰って無いんだから大変でしょ。それに父さんだって寂しいだろうし。」

ちよっと前までの笑いがあつた食卓は遠い昔のようになってしまった。

父と母は一昨年離婚した。

元々出張が多かつた父はほとんど家には居なかつた。

そのすれ違いと、仕事しか頭に無かつた父に耐えきれず、母の方から別れてと言つたのだつた。

慰謝料は請求しなかつたが、父は出張が多いということから家は母の財産となつた。

その時、子どもの親権問題が浮かび上がった。

父も親権を強く求めた。しかし、透は転校したくないという理由で、美沙はまだ母親の存在が必要だろうという理由で母と住む事に決め

たのだった。

透は、親権が決まった時の父の寂しそうな顔が忘れられなかった。

そこで、中学を卒業したら父の元へ行くと約束したのだった。

母は未だに猛反対をしているが…。

「お父さんと一緒に住む事にしたら唯野高校はもつと遠くなって行けなくなるわよ。」

「だから、唯野は行かないって。っていうか私立は行かないから。進路調査は宮沢先生に理由を話して延期してもらうよ。どうせいつかは話さなきゃだし。」

「透…」

「やつは俺疲れてるわ。母さんの言う通りなんか怒りっぱいし。ちよっと休んでくる。」

透は部屋へ戻った。

家に帰って来た時と同じようにベットに飛び込んだ。

透的にはどっちの親と暮らしたいなどの思いは無い。

自分をピアニストにしたかった母。

そのスパルタな指導から救ってくれ、一緒にバスケットをやってくれた父。

色々言いつつ、今はバスケットをする自分を応援し、栄養のとれた食事を作ってくれる母。

二人とも大事な親だから…。

壁に掛かっているユニフォームを見つめる。

本当は、本当は…唯野へ行きたい。

唯野へ行つて慎と共にバスケット部へ入りたい。

でも、父の家はこの家から電車で一時間以上掛かる。つまり唯野まで二時間程掛かるのだ。

部活をして片道2時間もかかるのは…しかも男2人での生活。難しいだろう。

そして何より唯野は私立高校。

母と暮らす事にしたら間違いなく私立なんか行けない。

つまり、どっちの親と暮らすにせよ唯野へは行けないのだ。

『唯野じゃなくなつたってバスケットは出来る。』

何度こう考えたことだろう。

でも、どうせやるなら憧れの唯野へ行きたいと考えてしまう…。

自分の高校生活の想像が全くつかず、考える度呆然としてしまう。

吹奏楽の練習疲れもあつてか、考えている間に眠っていた。

八段目：一日の始まり

『ジリリリ…』

AM 6 : 10

透はベッドから身を起こし目覚まし時計を止めた。

なんだかんだで昨日は9時頃寝てしまったからか、いつもより目覚めが良い。

顔を洗い、服を着替え、髪の毛をワックスで無造作っぽくあげる。全ての準備が出来た後、透は深く息を吐き、部屋を出た。

階段をゆっくり降りる。

リビングからは物音が聞こえてくる。

居るのは99%母だ。

昨日の事が鮮明に蘇る。

母に会いたくない。

ご飯を食べずに学校へ行こうかとも考えたが、そんな事したらずっと気まずいままだ。

透はリビングの扉を開けた。

「あら、透おはよう。部活終わったのに早いわね。」

母は至って普通だった。

「吹奏楽の練習あるから。これから夏休みまでずっとこの時間。」

「そうだったわね。部活は終わったけどこれからも早起きしてご飯作らなきゃ。あ、今日はもう出来てるからすぐ盛るわね。」

「あ…ありがとう。」

透はある事に気付いた。

母はいつも自分より早く起きてご飯を作ってくれる。

でも、母の仕事は9時からだし、自分が部活をしてなかったらこんなに早く起きる必要は無い。

なのに3年間何も言わず栄養満点の朝食を食べさせてくれた。

それを当たり前に感じてしまい、感謝することも忘れていた。

自分はこんなに母に苦労をかけときながら、一緒に暮らしたいという母を拒否し、父と暮らそうとしてるんだ…。

ふとそんな考えがよぎり、母に申し訳ない気がしてきた。

「考えたんだけどね、今度お父さんと三人で話そっか。」

テーブルにご飯、味噌汁を置きつつ母が言った。

「えっ？」

いきなりで、透は驚きを隠せなかった。

「昨日の夜お父さんに電話したの。もちろん透の進路の事でね。そうしたら、3人でちゃんと話し合おうって。お父さん日曜ならいつでも大丈夫って言うてたから近いうちに行きましょ。透もそろそろ…ちゃんと志望校決めなきゃだしね。」

「…分かった。」

正直理解しきれていなかったが返事をした。

母さんは父さんに連絡を取ったんだ…。あんなに嫌っていたのに。しかも3人で会うのなんて、離婚のゴタゴタ以降初めてだ。

「宮沢先生に上手く伝えられる？あれならお母さんが電話するけど…。」

「それ位大丈夫だよ。そんな子どもじゃないし。」

「あはは。そうね。じゃあ先生にちゃんと話ししておいてね。」

「了解。」

透は急いでご飯を詰め込んだ。

「あ、これからまた帰るの7時過ぎになるから。」

「うん。吹奏楽も頑張ってるね。大会お母さんも見に行くから。大会何日にあるの？」

「7月中だったとは思っけど…いつだっけ？」

「知らないの！？ちゃんと聞いて来てね！」

「はいはい。ごちそうさま。…あ、…部活終わったのに早起きさせちゃって…迷惑かけてごめん。」

さっき思った事を伝えてみた。

「いきなりどうしたの？迷惑なんて思っただけだよ。透がまた音楽をやってくれるの嬉しいし、それに透が何かに一生懸命なら母さんはそれを応援するわよ。」

母は笑顔だった。

「…ホントありがとう。それと昨日はごめん。」

透は視線を下に向けたまま言った。

母は何も笑顔で言わず頷いた。

「行ってきたす！！」

透はいつも通り学校へ向かった。

父さんと会うのはお正月以来だ。毎年正月以外は部活が忙しくなかなか会えなかった。

しかし、今はそれ所ではない。学校へ近づくにつれ、気持ちは進路から吹奏楽へと変わっていった。

『明日は朝から全体練習あるから。』

昨日舞が言っていた。

つまり1時間後には全体練習でシンバルを叩かなければならない。

昨夜もシンバルの事は頭にあつたがそれよりも、昨日の透には母との言い合いの方が大きかったのだ。

一気に気持ちが重くなる。

「早く行って練習しよ。」透は走り出した。

九段目：プライド

「おっ、水野。早いじゃん。どうしたの？」

音楽室に行くとまだ須田先生しか居なかった。

「練習しようと思って…。」

『どうしたの？』は無いだろ…。

「練習は7時以降からだからな。今日は特別に私が見てあげようか？」

「えっ!？」

一気に緊張する。

「ほら、やってみて。」

「いきなり!？」

「別にウォームアップも無いだろ？」

「そんなこと…」

そういえばウォームアップを教えてもらってなかった。シンバルにもあるのだろうか…？

とりあえず手首を回してシンバルを持ちあげた。

「じゃあmfで一発叩いてみて。」
メソフォルテ

「はい。」

深呼吸してふりかぶった。

「ジャン。」

多分ダメな音だ。

『良い音が分からない時は全部ダメな音だから。良い音はすぐ分かる。』

昨日の舞の名言だ。よく分かんない時はダメって事だ。

「やっぱまだ無理かぁ。水野、やっぱまだ全体練習出なくて良いから。」

「えっ？」

せつかく意気込んで来たのに…。

「そゆこと。じゃあ練習頑張れよ。」

須田はそう言い残し音楽室を出て行った。

透はあっけにとられた。

昨日あんなに真剣に話していたのに。

てか何も教えて無いじゃん。。

「水野君早いね。おはよ。」

舞がやってきた。

「…おはよ。」

「どうかした？今日は水野君の初全体だから頑張らなきゃね！」

「望月…さっき須田先生がまだ全体練習出なくて良いって言ってきた。」

「えっ？ホントに？」

「うん。」

「ちょっと須田先生と話してくる。水野君は練習してて。」

舞は音楽室から出て行った。

シンバルを持ち上げる。

『やっぱり良い音鳴らせなかったからかな。』

しかし、1発聞いただけで決めるなんて…。

透は昨日舞に言われた事を思い出しつつシンバルを叩いた。

透が練習していると部員が続々と登校してきた。それと一緒に舞も戻ってきた。

「須田先生何て言ってた？」

「まだ全体に混ぜるのは早いって。」

「そんなの当たり前じゃん！なのに自分で言ってたんだぞ？」

「水野君ならもっと出来てると思ったんだって……。」

よく分からないけど……何だか悔しい。
一生懸命やってるのに認められない。

透のプライドが何かを放った。

これにより透の気持ちは本当の意味で少しずつシンバルに向き始める。

九段目：プライド（後書き）

この章は後で書き直すかもしれません…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5666b/>

夢への階段

2010年10月28日08時13分発行